＜報告＞

学生の英語学習スタイルと所属専攻との関連性

Correlation between each major and students' English learning style

大和久　吏　恵[1)]　　山　田　七　恵[2)]　　加　賀　岳　彦[3)]

Rie OWAKU, Nanae YAMADA and Takehiko KAGA

Abstract

The action plan announced in 2003 by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) was to encourage institutions of higher education to improve students' proficiency in English required in "their own specialized fields or majors (English for Specific Purposes ; ESP)." In Japan Women's College of Physical Education, students are divided into four majors (Sports Science, Dance Studies, Sports Health Studies and Child Development Studies), each of which is assumed to have different learning styles. We carried out a questionnaire survey to find out whether there is any correlation between each major and students' learning style and to define what kind of learning style is effective in teaching each major. As a result, differences and trends in learning style among the four majors were revealed. The data gained from this research will be useful materials to support students' effective learning.

Keywords : *learning style, ESP, differences among the majors*

Ⅰ．はじめに

文部科学省は2003年に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」[1)]を発表し，高等英語教育の目標として「専門分野に必要な英語力や国際社会に活躍する人材等に求められる英語力を教育すること」を掲げた．日本女子体育大学（以下，本学）の学生も，今後在学中もしくは卒業後に国際的な場で研修・活躍することが予想されることから，本学でも2003年度，2007年度，2010年度の３回にわたり英語科目の見直しを進め，現行（2010年度以降）では次のような構成で英語科目を設置・配当している．１年次では，全新入生が習熟度別クラスに分かれ，レベルに応じて英語の基礎固めを行う英語Ⅰ・Ⅱが配当される．２年次以降では，英語文献・研究論文等の読解力養成のためのEAP（English for Academic Purposes）およびコミュニケーション能力の向上を目指したEGC（English for General Communication）の２科目が配当される．３年次以降は，ビジネスおよび英語資格試験（主に英検，TOEIC）向けのEPP（English for Professional Purposes）が配当される．これらの科目は，基礎から応用へと学習していけるよう体系的に構成され，学生が卒業後に社会の各方面で活躍することを想定した汎用性の高い学習内容を盛り込み，体育大学の学生にも必要とされる教養の涵養[2)]をも目的としている．

ただし本学では，スポーツ科学，舞踊学，健康スポーツ学，幼児発達学の４つの専攻に分かれており，英語学習の背景や目的，学生の好む取り組み方や学習方法等は，専攻間で共通する部分と異なる部分があるものと推測される．今後，上記のカリキュラムをさらに有効なものにし，本学学生の英語学習をより細かくサポートしていくためには，専攻間における学習スタイルの共通性と差異をより詳しく把握する必要がある．

また昨今では，専門性と結びついた英語力の養成，つまりESP（English for Specific Purposes）が提唱されるようになっている．ESPとは「国際語によるコミュニケーションを可能にし，情報の受信・発信が効率よくできる」[3)]教育法である．今後本学独自のESPの在り方を模索していくためにも，学習スタイルと専攻との関連性を調査しておくことは有意義であると考えられる．

１）日本女子体育大学（准教授）
２）日本女子体育大学（助教）
３）日本女子体育大学（准教授）

II．研究の目的と内容

1991年に本学で行われた生活調査にあったように[4]現在でも本学では多くの学生がスポーツ・ダンス等の諸活動に多くの時間を費やすため，英語学習に十分な時間を取ることは難しいと推測される．また学生の英語力は全体として見た場合格差が大きく，近年はその格差が広がる傾向にある．そのため本学の英語教育では，学生が自分の英語力に応じて，個人もしくはグループで必要な学習を自主的に行っていくことができる「自律した学習者」の養成を大きな目標としている．本稿では，「学習スタイル」の中でも自律的学習と関連性が大きいと考えられる「グループ学習に対する好悪」「個人学習に対する好悪」「小テストや宿題への依存度および有効性」「予習復習に対する好悪」「留学のニーズの有無」の５点における専攻間の共通性と差異の把握を目的とした．

今回の調査では，現カリキュラムで専攻別に授業が行われている１年次の「英語Ⅰ・Ⅱ」の受講生を対象とした．また調査内容は，保育士養成大学における英語学習の調査として開発されたアンケート「英語学習に関する学習スタイルと好み」[5]を，筆者３名が部分改訂したものから５項目を使い調査した．

III．方　　法

2013年度１年次学生に対して７月後半に英語学習に関するアンケートを実施し，532名分の回答を収集した．全項目数は39で，「英語学習に対する学習スタイルと好み」「受講したい英語の授業のタイプ」「英語学習の背景に関して」の３部より構成されている．項目36から39を除き，選択肢は「当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「当てはまらない」の４段階のリッカート尺度を採用した．これは「どちらとも言えない」という回答を排除することで回答を二極化し，学生の全体的な傾向を把握しやすくしたためである．

今回は39項目の中から，特に学習スタイルと関連性が深いと考えられる項目１「グループで学習するのが好きだ」，項目２「一人で学習すると学習がはかどる」，項目５「小テスト･宿題は学習に役立つ」，項目17「予習よりも復習中心の学習が自分に合う」を選択し，また本学学生が抱いている今後の展望を知るために項目35「２週間以上の留学をしてみたい」を選択し，その結果を抽出した．

IV．結　　果

項目１「グループで学習するのが好きだ」では，全体の傾向は「当てはまる」が「当てはまらない」をやや上回り（図１），半数以上の学生がグループで学習するのを好むという結果が出た．専攻別の結果（表１）を見ると，「当てはまる」と回答した学生は健康スポーツ学および幼児発達学では60％以上だったのに対し，スポーツ科学においては50％以下であった．

項目２「一人で学習すると学習がはかどる」に関して全体の傾向は「当てはまる」が72％，「当てはまらない」が28％となり（図２），およそ４分の３に当たる学生が個人で学習するとはかどると考えているという結果が出た．表２にある専攻別の結果でも，全専攻で同じ傾向が見られた．

項目５「小テスト・宿題は学習に役立つ」に関して

図１　グループで学習するのが好きだ（N＝532）

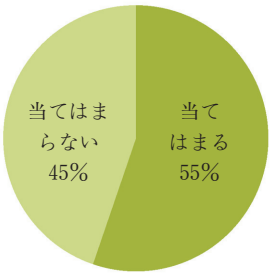

表１　グループで学習するのが好きだ

	人(中)		中級	初級	基礎	計
スポ科	224	当てはまる	31	31	45	107
		当てはまらない	32	29	56	117
舞踊	86	当てはまる	11	21	16	48
		当てはまらない	13	10	15	38
健スポ	181	当てはまる	39	42	31	112
		当てはまらない	24	19	26	69
幼発	41	当てはまる	5	6	16	27
		当てはまらない	4	6	4	14

図２　一人で学習すると学習がはかどる（N＝532）

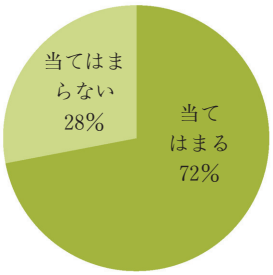

表２　一人で学習すると学習がはかどる

	人（中）		中級	初級	基礎	計
スポ科	224	当てはまる	54	40	70	164
		当てはまらない	9	20	31	60
舞踊	86	当てはまる	20	21	23	64
		当てはまらない	4	10	8	22
健スポ	181	当てはまる	54	36	35	125
		当てはまらない	9	25	22	56
幼発	41	当てはまる	7	9	14	30
		当てはまらない	2	3	6	11

図３　小テスト・宿題は学習に役立つ（N＝532）

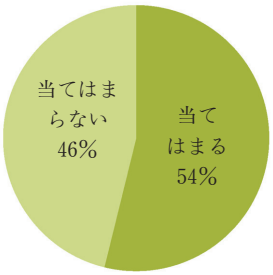

表３　小テスト・宿題は学習に役立つ

	人（中）		中級	初級	基礎	計
スポ科	224	当てはまる	37	32	51	120
		当てはまらない	26	28	50	104
舞踊	86	当てはまる	10	14	12	36
		当てはまらない	14	17	19	50
健スポ	181	当てはまる	41	39	28	108
		当てはまらない	22	21	29	72
幼発	41	当てはまる	6	4	12	22
		当てはまらない	3	8	8	19

図４　予習よりも復習中心の学習が自分に合う（N＝532）

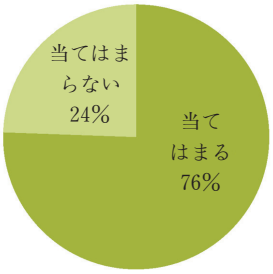

表４　予習よりも復習中心の学習が自分に合う

	人（中）		中級	初級	基礎	計
スポ科	224	当てはまる	42	47	84	173
		当てはまらない	21	13	17	51
舞踊	86	当てはまる	20	25	23	68
		当てはまらない	4	6	8	18
健スポ	181	当てはまる	45	46	44	135
		当てはまらない	18	15	13	46
幼発	41	当てはまる	9	7	10	26
		当てはまらない	0	5	10	15

全体の傾向は「当てはまる」の割合が54％，「当てはまらない」が46％となり（図３），半分以上の学生が小テスト・宿題は学習に役立つと考えているという結果が出た．しかし専攻別の結果（表３）を見ると，舞踊学ではおよそ60％の学生が「当てはまらない」と回答している一方で，健康スポーツ学では60％の学生が「当てはまる」と回答している．

項目17「予習よりも復習中心の学習が自分に合う」に関して全体の傾向は，「当てはまる」の割合が76％，「当てはまらない」が24％となり（図４），およそ４分の３に当たる学生が予習よりも復習中心の学習が自分に合うと考えている．専攻別の結果（表４）でも同じ傾向が見られたが，舞踊学・スポーツ科学・健康スポーツ学では約80％の学生が「当てはまる」と回答している一方，幼児発達学ではその割合が約60％にとどまった．

図５　２週間以上の留学をしてみたい（N＝532）

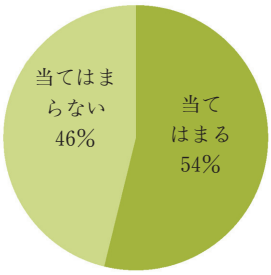

表５　２週間以上の留学をしてみたい

	人(中)		中級	初級	基礎	計
スポ科	224	当てはまる	38	24	42	104
		当てはまらない	25	36	59	120
舞踊	86	当てはまる	19	25	17	61
		当てはまらない	5	6	14	25
健スポ	180	当てはまる	38	36	22	96
		当てはまらない	25	25	34	84
幼発	41	当てはまる	12	10	3	25
		当てはまらない	7	6	3	16

項目35「２週間以上の留学をしてみたい」に関して全体の傾向は「当てはまる」の割合が54%，「当てはまらない」が46%となり（図５），半数以上の学生が２週間以上の留学をしてみたいと考えているという結果が得られた．専攻別の結果（表５）を見ると，「当てはまる」と回答した割合は各専攻とも異なり，舞踊学が71%で最も高く，以下幼児発達学が61%，健康スポーツ学が53%と続き，スポーツ科学が46%と最も低くなっている．

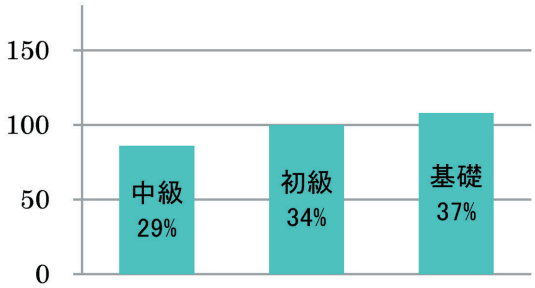

図６　項目１に「当てはまる」と回答した学生の割合（クラス別）

Ⅴ．考　　察

以上の結果を，習熟度レベルの数値と比較することで考察を試みたい．前述したように，本調査の主目的は英語教育において「自律した学習者」を育てるために学習スタイルと専攻との関連性を把握することであるが，実際の授業が習熟度別に行われていることを考えると，習熟度レベル間の数値の差を無視することはできない．よって本節では，３段階の習熟度レベル（基礎・初級・中級）の間に見られる数値の差と関連づけて考察していくことにする．

まずは項目１「グループで学習するのが好きだ」と項目２「一人で学習すると学習がはかどる」の結果についてである．本来学習は一人で行うべきであるが，英語が言語であり，言語がコミュニケーションの手段である以上，自分以外の人との関わり合うことなく（もしくは自分以外の他者を想定せずに）学習することは望ましいことではない．また，自分一人では正答を導けないとしても，周りと話し合い共に考えるという協同作業がもたらす学習効果も否定できない．項目１では全体で半数以上（55%）がグループ学習を好む結果となったが，レベル別の数値に着目してみると，健康スポーツ学以外の３専攻，また全体においても，基礎レベルの学生が最もグループ学習を好む傾向にあることが読み取れる（図６）．この理由としては，習熟度の低いクラスの方が，グループで一つの課題に取り組むと独力で取り組むよりも糸口が見つかりやすく，他の学生と協同することである種の安心感と親和的な学習環境が生まれるためと考えられる．

これを項目２の「一人で学習すると学習がはかどる」という質問への結果と比較すると，興味深い傾向が読み取れる．この項目においても，健康スポーツ学以外の３専攻と全体において，基礎クラスが最も高い値を示している（表２）．つまり，グループ学習を最も好む傾向にある３専攻が，一方で「グループよりも一人で学習する方が学習がはかどる」と考えているという結果が出た（図７）．項目１と項目２の間に対する結果は「グループで学習することは好きだけれど，一人で取り組んだ方がはかどる」という学生の意識を示していると思われる．図７にあるように，中級クラスで「当てはまる」と回答した学生の数もほぼ基礎クラスに並ぶ．基礎クラスと中級クラスにおいて「当てはまる」と回答した学生が多くなった理由として，中級クラスの学

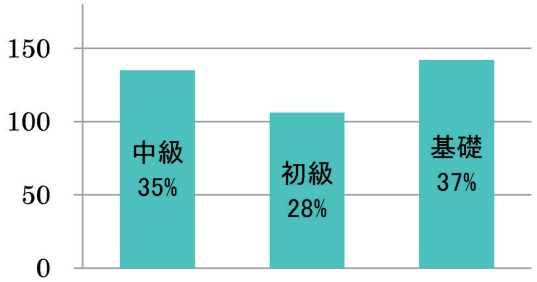

図７　項目２に「当てはまる」と回答した学生の割合（クラス別）

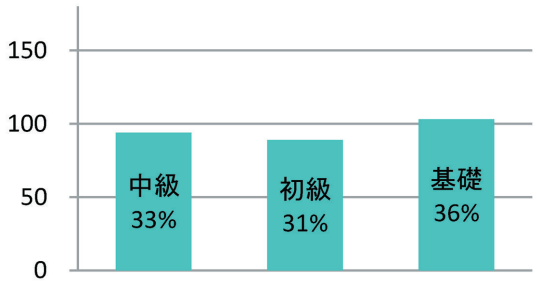

図８　項目５に「当てはまる」と回答した学生の割合（クラス別）

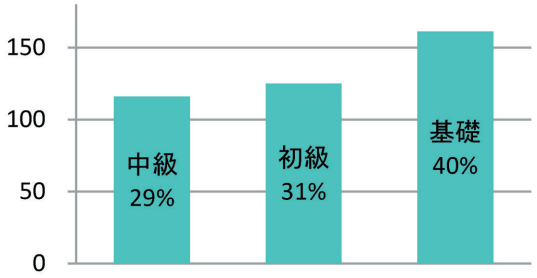

図９　項目17に「当てはまる」と回答した学生の割合（クラス別）

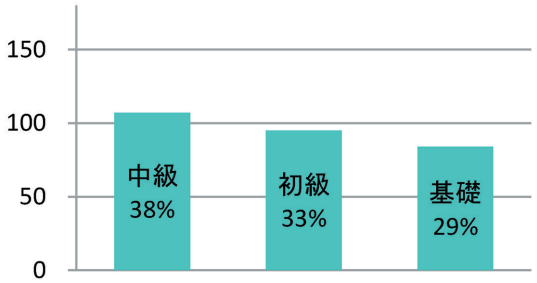

図10　項目35に「当てはまる」と回答した学生の割合（クラス別）

生は他の学生に頼らなくてもある程度自分で学習を進められる，ということが考えられる．自身で学習を進められるのであれば，他の学生と話し合って進むよりも自分一人で進めた方が早い，と感じていても不思議はないだろう．また，基礎クラスで数値が高かった理由として，他の学生と相談してもなかなかお互いに正解を引き出せなかった，結論が出なかった，という経験が影響していることが推測される．グループで学習することは，他と協力できて心強い反面，協力しても良い結果が出せずにもどかしい思いをする，という可能性も含んでいるからだ．表１にあるように，グループ学習を好む割合が全専攻のなかで最も高かった幼児発達学においても(66%，41人中27人)，表２にあるように，一人での学習の方がはかどることに同意したのは73%（41人中30人）と，個人での学習の効率を感じる割合が高くなっている．

次に，教員側が授業内容について考慮する際に参考となる項目５「小テスト・宿題は学習に役立つ」と項目17「予習よりも復習中心の学習が自分に合う」の結果であるが，こちらも基礎クラスにおいて「当てはまる」と感じている学生が多いという結果が出た．項目５に関して「当てはまる」と回答した学生のレベル別のグラフを見ると，基礎クラスが，その差は僅かではあるものの，小テストと宿題を最も好む傾向にある（図８）．また項目17「予習よりも復習中心の学習が自分に合っている」においても，「当てはまる」を選んだ学生のなかでも基礎クラスがその40%を占め，一番高い数値となっている（図９）．この結果から，基礎クラスの学生ほど，授業内での小テストや宿題に沿って理解度を高めたいと感じている，もしくはそれが自分に合ったスタイルだと考えている，と捉えることが可能である．基礎クラスの学生の方が，苦手意識があるがゆえに小テストなどで覚える機会がある方がよいと考えていることも予想できる．また図４で示されているように，全体でも76%の学生が，「予習より復習の方が自分に合う」と回答したこの結果は，専攻別・レベル別の差異以上に，本学学生が全体的に予習よりも復習を好むことを示している．上記の結果を考慮すれば，予習をするための宿題を課すよりも，既習事項を復習するための宿題や小テストの方が学生の学習意欲を引き出せる可能性が高いと考えられる．しかし予習が重要な役割をする語学においては，復習ばかりを取り入れた授業では「自律した学習者」を育てるのに十分とはいえない．

最後の項目35「２週間以上の留学をしてみたい」については，前節に記述したようにスポーツ科学以外の３専攻においては半数以上が「当てはまる」と回答し，全体でも同じ傾向を示している．レベル別に見ると（図10），中級クラスにおいて数値が高く，習熟度が高い学生ほど留学への意欲が高い．しかし，スポーツ科学では基礎クラスで，舞踊学では初級クラスで最も数値が高くなっていることを考えると，全体としてはレベルに関係なく留学に対する興味は広く潜在していると判断される．

以上，専攻・レベルごとの数値に着目し，結果を考察した．最後に，５項目の回答結果から読み取れる専攻ごとの傾向をまとめておく．

・スポーツ科学：グループよりも個人での学習を好む傾向が他専攻より強く[6]，予習より復習を好み，小テストや宿題の必要性を感じている．留学に対する興味は他専攻よりやや低い．
・舞踊学：グループでの学習を好む傾向がある一方で，個人での学習の方が学習がはかどると感じている学生の割合が他３専攻よりも高い．小テストや宿題を求める傾向は他専攻より低く，復習中心の学習を好む．留学に対する興味は４専攻の中で一番高い．
・健康スポーツ学：グループでの学習を好む傾向が比較的高い一方で，個人での学習の方が学習がはかどるとも感じている．小テストや宿題の必要性を感じている傾向は４専攻中一番高く，復習中心の学習を好む．留学に対する興味もある．
・幼児発達学：４専攻の中で最もグループ学習を好む傾向が高いが，他専攻同様，個人での学習の方がはかどるとも感じている．小テストや宿題を求める傾向もあり，復習中心の学習を好む．留学に対する興味も舞踊学の次に高い．

Ⅵ．結論と今後の展望

以上の考察から判明した４専攻における学習スタイルの大まかな共通性・差異を踏まえ，本学の英語教育において「自律した学習者」を養成し，専門性と結びついた英語力の養成をはかっていくのに必要と考えられる点および課題点をまとめたい．

まずは全体的視点から，次の７点を指摘することができる．

⑴　全体として強く見られた「グループで学習することは好きだけれど，一人で取り組んだ方がはかどる」という傾向は，矛盾してはいるものの，本学学生がこれら２つの学習スタイルのどちらかではなく，その「両方」に行う意義を感じていることを示している．授業においては，教授する内容・教材および言語活動等の適性に合わせて，グループ学習と個人学習を適宜「併用」することが有効であると考えられる．

⑵　全専攻において「一人で学習すると学習がはかどる」が高い数値を示した（72％）ことから，本学学生は，自分の学力に合わせ，自分のペースで学習したいという欲求が強いものと考えられる．授業においては，個人ごとの学習ペースの差を許容するような構成・時間配分を配慮する必要がある．

⑶　４専攻の基礎クラスおよびグループ学習を比較的好む専攻（特に健康スポーツ学，幼児発達学）においては，授業内で積極的にグループ学習を促し，安心して仲間同士で教え合い学び合う環境を設定するのが有効と考えられる．ただしグループ活動が他のメンバーへの依存・甘えにつながる可能性も考えられるので，個人で考え学習する要素を含んだグループ学習になるような指導方法が考えられなければならない．

⑷　個人学習を好む傾向が見られた専攻（特にスポーツ科学）では，その傾向を阻害することなく，少しでも「自律」するよう促すのが有効と考えられる．同時に，個人学習に行き詰ったときのサポートもしくは個人では得ることが難しい学習効果を得る場として，グループ学習を有効利用することも薦められる．

⑸　４専攻に共通して予習よりも「復習」を好む傾向が強く見られたことから，教室は主に学習事項を十分に聞き理解する場とし，家庭学習および後日の授業においてそれらを着実に復習させるという授業パターンを本学学生は求められていると考えられる．ただし先述したように，予習が重要である語学においては「復習」のさせ方のみならず，いかに「予習」させるかも今後考えなくてはいけない．「予習」と「復習」が習慣化すれば，英語学習の自律化にもつながる．

⑹　全体として小テストや宿題を求める傾向が強いので，上の「復習」を兼ねてこれらを頻繁に実施するのは有効と考えられる．ただし「自律した学習者」を養成するという観点から考えると，教員から課される小テストや宿題にいつまでも依存するのは好ま

しいことではない．小テストや宿題をこなしつつも，やがて自ら課題を設定し学習していくような指導方法が求められる．

(7) 留学への意欲は中級クラスにおいて高かったものの，初級・基礎クラスにおいても決して低くないことから，国際理解・国際教養的な内容は，全レベルの授業においてさらに盛り込まれるべきであると考えられる．

最後に，専攻ごとに望ましいと考えられる英語授業の方向性をまとめてみる．

・スポーツ科学：主に個人学習を想定した復習のさせ方および小テスト・宿題の課し方が工夫される必要がある．また国際教養的な内容を盛り込み，外国文化・留学等に興味が向くように指導していくことが望ましい．

・舞踊学：すでに留学に対する興味が高いので，グループでのコミュニケーション活動等を活発化し，学生による自主的な英語学習活動に導いていくことが望ましい．

・健康スポーツ学：グループ学習と個人学習を適宜有効に「併用」し，小テストや宿題に沿って着実な学力向上を図りつつ，やがてそれらへの依存から自律させる方向へ指導していくことが望ましい．

・幼児発達学：グループ学習と個人学習の両方の数値が高いため，授業では学習内容に応じてグループ学習をさせるか，個人学習をさせるかを的確に判断しながら指導していくことが望ましい．また健康スポーツ学と同様，自律的学習への指導も必要である．

今回の調査において，４専攻における学習スタイルの共通性と差異を大まかながら把握することができた．「自律した学習者」の育成および専門性と結びついた英語力の養成をはかるために，これらを基にしたより具体的な授業運営方法および指導方法等については，今後の課題としたい．

参考文献

1）文部科学省（2003）「英語が使える日本人」の育成のための行動計画, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf

2）浅見俊雄（2001）体育系大学における教育･研究のあり方を考える，日本体育大学紀要30：p.243-247.

3）野口ジュディー（2009）ESPのススメ－応用言語学からみたESPの概念と必要性－，ESP的バイリンガルを目指して－大学英語教育の再定義－Towards ESP Bilingualism…Redefining university English education in Japan…（福井希一，野口ジュディー，渡辺紀子編），p.6-7，大阪大学出版会，大阪.

4）深山智代，菊池潤（1991）女子体育大生における蓄積的疲労徴候の訴えと生活時間との観連，日本女子体育大学紀要21：p.45-52

5）カレイラ松崎順子（2009）保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する調査－English for Specific Purposes（ESP）の視点から－，JALT Journal，31.2，November，p.205-226.

6）Owaku, R. (2013) The Preferences of Learning Style among Majors: A Case Study at Japan Women's College of Physical Education, World Congress on Education (WCE-2013) Proceedings. pdf, p.105-106.

（平成25年９月11日受付
平成25年11月27日受理）